

委任統治期南洋群島における内地観光団 (1925-1927年)

千 住 一

はじめに

本稿の目的は、1922年4月から日本の委任統治下にあった南洋群島において実施された「内地観光団」（以下、観光団）のなかでも、1925年から1927年にかけて内地を訪れた計3回の観光団に着目し、関連史料に依拠しながら各観光団の行程および参加者について整理することにある¹⁾。観光団とは、南洋群島の旧来からの住民を参加者として、数週間にわたって内地に滞在し、内地各地を経巡ってから南洋群島へ帰還するというものであり、現時点で、1920年を除く1915年から1939年までのあいだ²⁾、年1回実施され続けたことが確認できている。

すでに筆者は、筆者がこれまで明らかにしてきた観光団の概要を整理した上で、日本による委任統治が始まった1922年から1924年にかけて実施された計3回の観光団の行程および参加者について、別稿にてまとめている³⁾。以下、1925年に実施された委任統治期における4回目の観光団、1926年に実施された第5回観光団、1927年に実施された第6回観光団について見ていくこととする。

I 第4回内地観光団（1925年）

1. 行 程

1925年に実施された第4回観光団に関する史料としては、南洋協会が7月

1日付けで発行した雑誌『南洋協会雑誌』に掲載されている、内地における一行の予定がまず挙げられる⁽⁴⁾。【表1】の「予定」がその内容であるが、それによると一行は、7月21日から8月7日まで内地に滞在し、横浜、東京、名古屋、京都、大阪、神戸、門司の順で移動し、各所を訪れる予定になっている。

実際に内地を訪れた観光団の様子については、9月1日付け発行の『南洋協会雑誌』に掲載された記事や⁽⁵⁾、各新聞報道から部分的にうかがい知ることができる。これらの史料から明らかにすることができた内地における訪問先を整理したものが、【表1】の「実施」である。両史料にもとづいて一行の内地での様子をより詳しく見ていくと、一行は上記した予定よりも3日遅い7月24日に日本郵船の「泰安丸」にて横浜へ入港し、その日のうちに東京まで移動して「繁星館」に投宿している。

一行が東京各所への訪問を開始したのは27日からであり⁽⁶⁾、当日は、宮城拝観を皮切りに、正午に東京市役所にて関東大震災後の復興計画についての説明と茶菓の饗応を受けた後、丸ビルへ向かっている。丸ビルでは、精養軒にて南洋協会による昼食会が開催され、会食後は屋上庭園において記念撮影も行われた⁽⁷⁾。

それから数日間の様子をうかがい知ることにはできないが、一行は、8月1日に両国国技館を訪れている。両国国技館では、『万朝報』を発行する万朝報社が「大納涼園」なる催し物を開催しており、催し物の詳細は不明であるものの、そこでの一行の様子は次のように伝えられている。「一行は本社員の案内で「大江山の鬼退治」や「浦島太郎」の話聞き〔中略：引用者注〕、最後に龍宮踊を見て「水の中から美しい女が出て来ても、どうして着物がぬれないのでせう」と舞台の巧妙さを不思議がつ」た⁽⁸⁾。

その後一行は、前述した予定よりも4日間長く東京に滞在し、8月3日に名古屋へ向けて出発した。翌4日に名古屋に到着した一行は、名古屋駅前の「丸屋旅館」に投宿する。各新聞報道によると、4日の行動内容は【表1】の「実施」に記したとおりであるが、なかでも名古屋市役所では、市長の田阪千助招待による午餐会が開催された⁽⁹⁾。なお、一行は翌5日に名古屋を出発して京都に向かう予定であると報じられているが、5日から7日にかけての行動

内容は不明である。

9日付けの『大阪朝日新聞』は、一行が8日に大阪に到着したことのほか、大阪到着までに「東京、名古屋、京都、奈良等を見物」したと伝えている⁹⁰。また、9月1日付け発行の『南洋協会雑誌』掲載記事にも同様の記述が見られることから⁹¹、一行は先述した予定どおり名古屋から京都へ移動したものの、予定には含まれていなかった奈良に立ち寄ってから、大阪に向かったと考えられる。なお、大阪での行動内容については、到着した8日に大阪市役所と大阪朝日新聞社を訪問したこと以外は不明である。

同様に、一行が大阪を出発した日にちについても不明であるが、13日付けの『大阪朝日新聞附録九州朝日新聞』には、一行は13日に門司に到着して「製鉄所視察のため八幡に向ふ」予定であり、「門司市役所では時間の都合によつては歓迎会を開く」とのことである、と記されている⁹²。また、9月1日付け発行の『南洋協会雑誌』掲載記事には、「大阪神戸門司各地の視察見学を終り八月十五日出帆泰安丸に乗船帰途に就たり」⁹³、とあるため、一行は大阪から神戸、門司へと移動し、当初の予定よりも5日間長く内地に滞在し、15日に往路と同じく日本郵船の「泰安丸」にて門司から南洋群島へ帰還したと考えられる。

2. 参加者

筆者がすでに明らかにしたように⁹⁴、南洋群島の委任統治機関たる南洋庁発行の統計資料には、第4回観光団の参加人数が20名であり、参加者はトラック、ポナペ、ヤルート支庁の住民であると記されているが⁹⁵、多くの新聞も同様の報道を行っている。

また、参加者の属性については、村長、村役場書記、助教員、農業従事者といった報道が散見されるとともに、年齢については、「十八歳から五十歳」という報道が看取される⁹⁶。なお、参加者の性別に関しては、19名が男性で1名が女性であるとの報道が多くあり、なかでも女性参加者の存在は「紅一点」という表現でたびたび紙面に取り上げられている⁹⁷。

ところで、観光団参加者のなかには日本語を解する者が何人か含まれてい

たようで、助教員や村役場給仕の肩書きを持つ参加者たちが発したとされる日本語が、頻繁に紙面に登場する。これらの日本語話者については、「通訳として各島から三名宛語学の堪能者がついて来た」という記述が看取されることや¹⁸⁾、ある日本語話者が語ったとされる「私達が通訳を兼務して居ります」ということばから¹⁹⁾、一行の通訳を兼ねていた参加者であったと考えられる。

その他、観光団一行は、南洋庁所属の職員によって引率されており、引率職員の存在は新聞紙上で頻繁に言及されている。

Ⅱ 第5回内地観光団（1926年）

1. 行 程

1926年に実施された第5回観光団に関する史料としては、防衛省防衛研究所所蔵の文書がまず挙げられる。当該文書は、南洋庁が7月29日付けで海軍省に送付したものであり、そこには「今般当庁管内島民開発上内地事情ヲ知悉セシムル為有力者約二十名ヲ以テ内地観光団ヲ組織シ別紙ノ通観光ノ予定」があると記され、2種類の「観光日数並観光予定地」と題された別紙が添付されている²⁰⁾。

別紙の第一には、8月11日に横浜に到着した後、東京、名古屋、京都、大阪、門司の順で移動し、9月3日に門司から出発するという行程が各地での訪問先とともに記されており、別紙の第二には、8月9日に横浜に到着した後、同様の行程をたどって9月3日に門司から出発するという行程が各地での訪問先とともに記されている。両者の相違点を整理すると、前者で内地到着1日目の11日に記されていた「健康診断」が、後者では2日目の10日に予定され、前者で2日目の12日に示されていた訪問先が、後者では3日目の11日に移動し²¹⁾、前者で3日目の13日に示されていた「靖国神社」が、後者では11日に移動しているとともに、後者の13日の予定に「新宿御苑」が追記されている。また、前者では18日に「燐酸肥料製造工場其ノ他」と記されていたが、後者では18日が「未定」となっているかわりに、12日に「小松川人造肥料会社工場、国技館」との記載がある。両者間の相違は以上であり、その

他の訪問先および訪問日程に相違は見られない。

後に詳しく見るように、観光団は8月9日に横浜に到着していることから、最初に別紙の第一が訪問予定として作成され、次いで、観光団の内地到着日変更に伴って、第一のものに上述したような変更を加えた別紙の第二が作成されたと考えるのが妥当であろう。よって本稿では、別紙の第二に記載された訪問日程を観光団の予定として扱う。【表2】の「予定」に記したものが、それである²³⁾。

実際に内地を訪れた観光団の様子については、10月1日付け発行の『南洋協会雑誌』への掲載記事や²⁴⁾、各新聞報道から部分的にうかがい知ることができる。これらの史料から明らかにすることができた内地における行動を整理したものが、【表2】の「実施」である。両史料にもとづいて一行の内地での様子をより詳しく見ていくと、一行は8月9日に日本郵船の「筑後丸」にて横浜へ入港し、その日のうちに東京まで移動している。11日は東京市役所と丸ビルを訪れているが、丸ビルでは精養軒にて南洋協会による歓迎会が開かれ、茶菓の饗応と記念撮影が行われた²⁵⁾。14日は代々木練兵場と明治神宮を訪れたとの報道があり、なかでも代々木練兵場では、「麻布三連隊の演習と特に一行の為に飛んで来た所沢航空隊の飛行機を見学した」という²⁶⁾。

その後の一行の様子は21日の名古屋到着まで不明であるが、名古屋では名古屋駅前の「丸屋旅館」に投宿している。22日は名古屋放送局を訪れ²⁷⁾、「南洋の民謡を初め「蛍の光」や「軍艦マーチ」を放送」したと報じられているが²⁸⁾、これは何らかのラジオ放送のなかでこれらの歌を実際に披露したものと考えられる。

一行は、名古屋に続いて京都を訪れているが、京都では三条の「日吉屋旅館」に投宿し、【表2】の「実施」に記された場所を訪問したと報じられている。26日の予定に関しては、「桃山御陵参拝後清水方面を観光、正午は四条菊水館に於ける市の午餐会に臨み、午後は岡崎公園を始め疎水インクライン其他を逍遙」するとある²⁹⁾。

大阪では、27日の様子しか明らかにすることができないが、『大阪朝日新聞神戸版』によると、一行は大阪市役所を訪れ、「お土産としてタオルの寄贈

を受け」た後、大阪朝日新聞社へ向かい、「朝日式超高速度輪転機」が稼働する様子を実見し、また、「屋上露台から大大阪の殷賑を大観し茶菓の饗応を受けた」³³。なお、同紙には、その後の予定として、「二十八日は造幣局、大阪城、新世界、衛生博を観覧、二十九日自由行動、三十日は森永工場を参観、宝塚少女歌劇を見物し三十一日は[中略：引用者注]貝ボタン工業を視るために港区鶴町方面の工場を訪ひ、さらに神戸市に赴き川崎造船所を参観して即日帰阪、一日早朝大阪駅発」という記述が見られる³⁴。

次いで明らかにできたのが、一行が九州に渡った後の9月2日の行動内容であるが、各紙報道によると、一行は戸畑市役所で「茶菓の饗応を受け同地旭ガラス製糖会社其他よりの土産の寄贈品を受け」³⁵、各工場を訪問した後、夜は下関の「鎮海楼」で開催された「南洋パラヲ第一の成功家中島淳氏主催の歓迎会」に出席した³⁶、とある。なお、この中島淳という人物についての詳細は不明である。

一行は翌3日に日本郵船「筑後丸」にて門司から出発しているが、内地滞在最終日の様子は次のように伝えられている。「最後の一夜を門司市石田旅館で明したが、一行は三日早朝から市中見物に出掛け、愛児や愛妻友人知己への土産物として飛行機の玩具や赤い模様の入った着物や、中には未だ見ぬ桜の造花を買ひ求めるものもあり。又、帽子やミシン機械等を求むるものもあった」³⁷。

2. 参加者

筆者がすでに整理した南洋庁発行の統計資料には、第5回観光団の参加人数が20名であり、その内訳はパラオ支庁から19名、ヤップ支庁から1名と記されている³⁸。一方、10月1日付け発行の『南洋協会雑誌』掲載記事には、「団員氏名」としてパラオ支庁に居住する19名の氏名、職業、年齢が明記されているが、ヤップ支庁からの参加者1名に関する記述は見られない³⁹。この記事には、先述した観光団の予定が記された別紙の第二の内容が、「観光日程」としてそのまま掲載されているため⁴⁰、この19名の名簿に関しても観光団の予定が作成された時点のものである可能性が高く、ヤップ支庁の1名

に関しては後から追加になったと考えるのが妥当であろう³⁷⁾。

10月1日付け発行の『南洋協会雑誌』に「団員氏名」として記された19名の属性を確認しておくと、「農業」が8名、「村巡警」が3名、「電信所傭人」、「村助役」、「支庁巡警」、「南洋庁傭人」、「商業」、「雑業」、「南貿店員」³⁸⁾、「大工」がそれぞれ1名となっており、年齢は、20歳代が11名、30歳代が6名、40歳代が2名となっている。なお、この「団員氏名」には参加者の性別が記されていないものの、一連の新聞報道より、参加者は全員男性であったと判断できる。

また、10月1日付け発行の『南洋協会雑誌』には、「電信所傭人」の参加者が一行の通訳としての役割を担っていることや³⁹⁾、複数の南洋庁職員が観光団を引率していることが記されているが⁴⁰⁾、同様の報道を多くの新聞記事に看取することができる。

Ⅲ 第6回内地観光団(1927年)

1. 行程

1927年に実施された第6回観光団に関する史料としては、新聞各紙による報道のほか、『日の光』に掲載された観光団参加者による手記「第六回内地観光団日誌」(以下、「観光団日誌」)が挙げられる⁴¹⁾。【表3】は、その「観光団日誌」の内容にもとづいて再構成した第6回観光団の内地における訪問先であり、一行は6月29日に横浜に到着してから、東京、名古屋、京都、大阪を経て、7月21日に門司から出発していることが分かる。

以下、「観光団日誌」の内容を踏まえながら一行の内地での様子を詳しく見ていくと、一行は、日本郵船「春日丸」で横浜に入港し⁴²⁾、東京では「繁星館」に投宿した。6月30日は二重橋前で「サイケイレイ」をし、東京市役所では市長の西久保弘道から訓示があったという⁴³⁾。なお、「東京出張所[原文はカタカナ]」とあるのは、過去の観光団のありようを踏まえると、南洋庁の東京出張所のことであったと推察される。

7月2日は東京府立第一中学校のほか、小学校、大学校、病院を訪れたとあるが、その詳細は不明である。また、翌3日は「小崎サンノ教会」を訪れ

たと記されており⁹⁴⁾、これは小崎弘道が設立に深く関わり、小崎自身が牧師を務めていた霊南坂教会のことであると思われる⁹⁵⁾。5日に訪れた浅草では、「マヅカンノンサマヲオガンデ、ソレカラモクバニノツタリ、カツドウヲミタリ、シバイヲミタリ、アサクサノ公エンニアソンドリシマシタ」とあるほか、ある観光団参加者が蓄音機を購入したという⁹⁶⁾。7日は、貯金局と湯島小学校を訪れた後、「守屋サンノウチ」で「ユウハンヲタベテカラ、サンビカヲウタイマシタ」とあるが⁹⁷⁾、この守屋という人物の詳細は不明である。8日は丸の内の中央亭で手品を見て昼食をとった後、「観光団日誌」の書き手は東京市役所と東京出張所を再び訪れているが、その間、ほかの参加者は三越で買い物をしたとあり⁹⁸⁾、観光団の全参加者が必ずしも同一の行動をしていたわけではないことが分かる。

東京を後にした一行は名古屋に滞在しているが、10日は教会を訪れた後、「ホウソウキョクデサンビカヲウタイマシタ」とあることから⁹⁹⁾、前年の観光団同様、何らかのラジオ放送に参加して、実際に讃美歌を披露したと考えられる⁹⁹⁾。11日は名古屋離宮の後、「皿ヲツクルトコロ」と「時計ヲツクルトコロ」を見学したとあるが¹⁰⁰⁾、それらの詳細は不明である。

その後一行は、京都を経て大阪に滞在しているが、16日の午後は「コウリヲツクルトコロ」や「オカネヲツクルトコロ」をみたとある¹⁰¹⁾。前者はいずれかの製氷所であると考えられ、後者については過去の観光団のありようから造幣局のことであると判断できる。17日は日帰りで宝塚を訪れており、ここでは「ダンスヲミタリ、シバイヲミタリ」した¹⁰²⁾。なお、『大阪毎日新聞』によると、一行は大阪滞在中、大阪駅前の「金龍館」に投宿している¹⁰³⁾。

一行は18日から門司に滞在し、「石田ホテル」に投宿する。18日は門司に着いた後、「観光団日誌」の書き手は門司市役所を訪れているが、その間、ほかの参加者は宿舎で休憩していたという¹⁰⁴⁾。19日は、「サトウヲツクルトコロ」、「イトヲツクルトコロ」、「ガラスヲツクルトコロ」、「テツヲツクルトコロ」をそれぞれ見て回ったとあるが、『福岡日日新聞』によると、一行は戸畑市の市長と市内で面会し、「同市各会社其他寄贈に係る土産品」を受け取った後、「明治紡績、旭硝子、明治製糖等の各主要工場を視察し、八幡市に向か

った」⁶⁶。そのため一行は、これらの工場を実見した後、八幡製鉄所を訪れたと考えられる。なお、20日に訪れたという「セメントヲツクルトコロ」の詳細は不明である⁶⁷。

その後一行は、21日に門司から南洋群島に向けて出港し、29日にパラオに到着しているが⁶⁸、8月1日付け発行の『南洋庁公報』によると、復路で一行が利用したのは日本郵船の「泰安丸」であった⁶⁹。

ところで、「観光団日誌」には、南洋群島を出発する前および南洋群島に到着した後の様子も描かれている。その内容を確認しておくと、6月22日に何人かの観光団参加者を乗せた船がパラオに到着し、「観光団日誌」の書き手と合流している。その後、参加者はパラオ支庁へ行き、そこで南洋庁長官から訓示を受け⁷⁰、それから「マチノ中ヲクルクルケンプツ」し、午後にパラオから出港したとある⁷¹。また、7月29日にパラオに到着した一行は、再び南洋庁長官から訓示を受けており、そこでの長官の様子は、「ミンナガゲンキデイツテキタコトヲ、非常ニヨロコンデ下サイマシタ」と記されている⁷²。

2. 参加者

筆者がすでに整理した南洋庁発行の統計資料には、第6回観光団の参加人数が13名であり、その内訳はトラック支庁から4名、ポナペ支庁から9名と記されており⁷³、多くの新聞も同様の報道を行っている。また、『福岡日日新聞』は、参加者の属性に関して「職業は農業、巡警、助教員、村長等」という報道を行っており⁷⁴、『報知新聞』は助教員の肩書きを持つ参加者が一行の通訳を務めている様子を伝える⁷⁵。その他、参加者の性別については、各新聞報道の内容を踏まえると全員が男性であったと判断できる。

ところで、上記したように観光団参加者はパラオに集合し、そこから内地に向けて出発している。復路についても同様で、パラオに一旦寄港し、そこから各自の居住地域へと帰っていったと考えられる。なお、今回の観光団についても、複数の南洋庁職員が南洋群島から観光団を引率しており、その存在は「観光団日誌」や新聞報道に頻繁に取り上げられている。

おわりに

ここまで、1925年から1927年にかけて実施された3回の観光団の行程および参加者の詳細について、各史料に依拠しながら整理した。以下、各観光団の共通点および相違点に注意しながらその成果をまとめる。

まず行程であるが、横浜、東京、名古屋、京都、大阪、門司というルートを基本とし、第4回は奈良と神戸、第5回は予定しか確認できないものの宝塚と神戸、第6回は宝塚を訪問している。別稿で明らかにしたように⁶⁶、観光団が名古屋に立ち寄るようになったのは1923年に実施された第2回からのことであり、観光団の名古屋行きはもはや恒例化したといえる。また、内地における滞在日数は第4回が23日、第5回が26日、第6回が23日となっているが、第5回は他の観光団よりも東京滞在が長くなっている。

各地の訪問先については、訪問予定の場所も含めてであるが、3回の観光団を通じてほぼ共通していたと考えられる。明らかになった訪問先に関しては、第4回では両国国技館における「大納涼園」、第5回と第6回では名古屋におけるラジオ放送、第6回では比叡山や宝塚といったところが特徴的であろう。また、すべてを明らかにできたわけではないが、東京、名古屋、京都、大阪、門司での宿泊先は、第1回から第6回までの多くの部分で共通している。

次に参加者についてであるが、人数に関しては20名、20名、13名という推移をたどり、性別に関しては、第4回に女性が1名参加した以外はすべて男性であった。また、属性に関しては、農業従事者、巡警、村役場関係者といった肩書きが各観光団に共通して報じられているほか、第5回ではより詳細な参加者の職業が明らかになっている。そして、各観光団において、参加者のなかに日本語話者が含まれており、彼らが一行の通訳を兼任していたとされる。その他、観光団一行を南洋庁の職員が南洋群島から引率するというかたちにも、第1回観光団からの共通性が看取できる。

さて、別稿で「南洋群島観光」と位置づけた現象を⁶⁷、第6回観光団においてもみてとれることは重要であるが、本稿で特に指摘しておきたいのは、第5回観光団の実施に際して南洋庁が作成した文書に見られる文言についてである⁶⁸。そこには、観光団実施の目的が「島民開発」であって、そのために住

民有力者を内地に連れて行き、「内地事情ヲ知悉」させると明記されていた。

今後、委任統治期における残りの観光団の詳細を段階的に明らかにすることにより、こうした意図をもって実施された観光団が、いかなる展開を迎えるに至ったかを素描していきたい。

謝 辞

故山口洋児氏および辻原万規彦先生（熊本県立大学）からは、本稿で取り上げた3回の観光団に限らず、委任統治期に実施された複数の観光団に関わる史料の提供を受けた。ここに記して謝意を示したい。

注

- (1) 依拠する史料の成立背景上、今日では使用が躊躇されている表現が引用されている場合がある。また、史料引用に際して、旧字体の漢字は新字体に改め、ルビは省略し、適宜句読点を補った。なお、地名に関しては、当時の南洋群島において呼称されていた地名を使用している。
- (2) 日本は、1914年からアジア・太平洋戦争期に至るまで南洋群島を統治した。
- (3) 千住(2012)。
- (4) 南洋協会(1925a:107)。南洋協会については、以下を参照のこと。千住(2012:131)。
- (5) 南洋協会(1925b)。
- (6) 南洋協会(1925b:120)。
- (7) 南洋協会(1925b:120)。9月1日付けで発行された『南洋協会雑誌』同号の口絵には、その際のものと思われる集合写真が、「南洋群島第四回内地観光団本会訪問記念」というキャプションとともに掲載されている。
- (8) 『万朝報』1925年8月2日付け朝刊2面。
- (9) 『新愛知』1925年8月5日付け夕刊2面。『名古屋新聞』によると、午餐会では「ホワイトライスにビフテキ、サラダなど」が饗されたという。『名古屋新聞』1925年8月5日付け夕刊2面。
- (10) 『大阪朝日新聞』1925年8月9日付け朝刊9面。
- (11) 南洋協会(1925b:120)。
- (12) 『大阪朝日新聞附録九州朝日新聞』1925年8月13日付け朝刊C-9面。
- (13) 南洋協会(1925b:120)。
- (14) 千住(2006:60)。
- (15) 南洋庁(1934:472)。
- (16) 『やまと新聞』1925年7月25日付け朝刊3面。

- (17) 『中外商業新報』1925年7月25日付け朝刊7面。『東京朝日新聞』1925年7月28日付け朝刊2面。
- (18) 『やまと新聞』1925年7月25日付け朝刊3面。
- (19) 『時事新報』1925年7月25日付け朝刊9面。
- (20) 南洋庁長官横田郷助より海軍次官大角岑生宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1926年7月29日（防衛省防衛研究所所蔵『大正十五／昭和元年公文備考：雑件一』巻124）。
- (21) 前者には「宮城拝観」と記されていたが、後者にその記述は見られない。
- (22) 10月1日付け発行の『南洋協会雑誌』には、別紙の第二の内容が「観光日程」として掲載されている（南洋協会1926a：123）。
- (23) 南洋協会（1926a）。
- (24) 南洋協会（1926a：122）。その際のものと思われる集合写真が、「南洋群島第五回内地観光団本会訪問記念」というキャプションとともに、9月1日付け発行の『南洋協会雑誌』口絵に掲載されている（南洋協会1926b）。
- (25) 『中央新聞』1926年8月15日付け夕刊1面。
- (26) 『名古屋新聞』には、22日は長島町の教会で朝の礼拝を行った後に放送局を訪れる、という予定が記されている。『名古屋新聞』1926年8月22日付け朝刊7面。
- (27) 『大阪毎日新聞愛知岐阜三重版』1926年8月24日付け夕刊9面。
- (28) 『京都日出新聞』1926年8月26日付け夕刊1面。
- (29) 『大阪朝日新聞神戸版』1926年8月29日付け朝刊11面。
- (30) 『大阪朝日新聞神戸版』1926年8月29日付け朝刊11面。
- (31) 『九州日報』1926年9月3日付け朝刊3面。
- (32) 『福岡日日新聞』1926年9月4日朝刊3面。
- (33) 『福岡日日新聞』1926年9月4日朝刊3面。
- (34) 南洋庁（1934：472）。
- (35) 南洋協会（1926a：122）。
- (36) 南洋協会（1926a：123）。
- (37) 『都新聞』は、一行は7月29日にパラオを出発し、ヤップ、サイパンに寄港して内地に到着したとの報道を行っており、ヤップ寄港の際に1名の参加者が観光団に合流したとも考えられる。『都新聞』1926年8月10日付け朝刊13面。
- (38) 「南貿」とは「南洋貿易株式会社」の略であると考えられる。南洋貿易株式会社は当時、南洋群島各地において各種事業に取り組んでいた。
- (39) 参加者のなかには公学校を卒業した日本語話者が多く含まれている、と報じる新聞もある。『中外商業新報』1926年8月10日付け朝刊7面。『国民新聞』1926年8月10日付け朝刊7面。
- (40) 南洋協会（1926a：122）。
- (41) サブロー（1927）。『日の光』については、以下を参照のこと。千住（2012：12）。

- 127)。
- (42) 同船には、内地の大学病院で足の手術を受けるためにポナベの首長が乗船しており、各紙とも観光団の到着とともにこの首長の存在を大きく取り上げている。
 - (43) サブロー (1927:17)。
 - (44) サブロー (1927:18)。
 - (45) 霊南坂教会については以下が詳しい。飯・府上編 (1979)。なお、1917年および1923年に実施された観光団も、霊南坂教会を訪れている。
 - (46) サブロー (1927:19)。
 - (47) サブロー (1927:19-20)。
 - (48) サブロー (1927:20)。
 - (49) サブロー (1927:20)。
 - (50) 観光団の引率者として「観光団日誌」および新聞報道に頻繁に名前が上がる光安国男は、後に観光団を引率した際のことを回想している。光安は何度か観光団の引率を行ったとのことで、1927年の観光団のことであるかどうかは不明であるが、名古屋の放送局での出来事を以下のように振り返っている。「名古屋の放送局を訪ねたときには即席で何か放送せよと云われ、クサイ島〔ポナベ支庁に属する島：引用者注〕の島民語で讃美歌を歌わせた。最初の挨拶は私がやったが、昭和の初年頃初放送した経験者はそう沢山はいないだろうといささか自負している」(南洋群島協会編 1965:96)。
 - (51) サブロー (1927:21)。
 - (52) サブロー (1927:22)。
 - (53) サブロー (1927:22)。
 - (54) 『大阪毎日新聞』1927年7月16日付け朝刊9面。
 - (55) サブロー (1927:22)。
 - (56) 『福岡日日新聞』1927年7月20日付け朝刊7面。
 - (57) サブロー (1927:23)。
 - (58) サブロー (1927:25)。
 - (59) 『南洋庁公報』113号、172ページ(今泉監修2009に所収されているものを参照した)。
 - (60) 当時の南洋庁長官は、横田郷助。
 - (61) サブロー (1927:14)。
 - (62) サブロー (1927:25-26)。
 - (63) 南洋庁 (1934:472)。
 - (64) 『福岡日日新聞』1927年7月20日付け朝刊7面。
 - (65) 『報知新聞』1927年6月30日付け夕刊2面。
 - (66) 千住 (2012)。
 - (67) 千住 (2012:130)。
 - (68) 南洋庁長官横田郷助より海軍次官大角岑生宛「南洋群島島民内地観光ニ関ス

研究ノート

ル件」1926年7月29日（防衛省防衛研究所所蔵『大正十五／昭和元年公文備考：雑件一』巻124）。

参考文献

- 飯清・府上征三編1979『靈南坂教会一〇〇年史』靈南坂教会創立一〇〇年記念事業実行委員会。
- 今泉祐美子監修、辻原万規彦編集2009『南洋庁公報：第六巻』ゆまに書房。
- サブロー1927「第六回内地観光団日誌」（『日の光』4：13-26）。
- 千住一2006「委任統治期南洋群島における内地観光団に関する覚書」（『立教大学観光学部紀要』8：59-64）。
- 千住一2012「委任統治期南洋群島における内地観光団（1922-1924）」（『奈良県立大学研究季報』22(4)：123-136）。
- 南洋群島協会編1965『思い出の南洋群島』財団法人南洋群島協会。
- 南洋協会1925a「内地観光団の来航」（『南洋協会雑誌』11(7)：107）。
- 南洋協会1925b「南洋観光団の往来」（『南洋協会雑誌』11(9)：120）。
- 南洋協会1926a「南洋庁主催第五回内地観光団歓迎」（『南洋協会雑誌』12(10)：122-123）。
- 南洋協会1926b「南洋群島第五回内地観光団本会訪問記念」（『南洋協会雑誌』12(9)：口絵）。
- 南洋庁1934『第二回南洋庁統計年鑑』南洋庁。

表1 第4回内地観光団(1925年)の行程

日数	月日	実 施	予 定
1	7/21		横浜着上京、健康診断
2	7/22		宮城、拓殖局、南洋庁出張事務所、市役所、南洋協会、丸ビル
3	7/23		明治神宮、淀橋専売局、浄水場、新宿園
4	7/24	横浜に到着、東京へ移動	三越、松屋呉服店、動物園、浅草公園
5	7/25		靖国神社、近衛歩兵連隊、午後休養
6	7/26		希望者は教会へ出席、休養退京準備
7	7/27	宮城、東京市役所、丸ビル	東京発、名古屋着
8	7/28		市役所、名古屋城、熱田神宮、紡績会社其他陶器製造工場等
9	7/29		名古屋発、京都着、市役所、御所
10	7/30		東西本願寺、京大、学術院、平安神宮、商品陳列館等
11	7/31		桃山御陵、乃木神社、京極、四條碁等
12	8/1	画国技館	京都発、大阪着、市役所、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社
13	8/2		休養(希望者は教会へ出席)
14	8/3	東京を出発、名古屋に到着	大阪城、造幣局、船場小学校
15	8/4	名古屋離宮、日本陶器、商品陳列所、三菱内燃機、公園、名古屋市役所	新世界、千日前
16	8/5		大阪発、神戸着、市役所、湊川神社、川崎造船所、其の他、神戸発
17	8/6		乗船、帰島
18	8/7		
19	8/8	大阪市役所、大阪朝日新聞社	
20	8/9		
21	8/10		
22	8/11		
23	8/12		
24	8/13		
25	8/14		
26	8/15	門司を出発	

出典)

「実施」：各新聞報道および南洋協会(1925b:120)にもとづき、筆者作成(2012年8月)。

「予定」：南洋協会(1925a:107)より転載。

注)

空欄部分は出典に記載がないことを意味する

表2 第5回内地観光団(1926年)の行程

日数	月日	実 施	予 定
1	8/9	横浜に到着、東京へ移動	午後四時横浜着、上京
2	8/10		健康診断、休養
3	8/11	東京市役所、丸ビル	靖国神社、(十一時) 拓殖局、(正午) 南洋庁出張所、(十二時半) 市役所、丸ビル、(三時) 南洋協会
4	8/12		小松川人造肥料会社工場、国技館
5	8/13		午前九時新宿御苑、淀橋専売局、浄水場
6	8/14	代々木練兵所、明治神宮	近衛歩兵連隊、明治神宮及同外苑、午後六時日比谷公園
7	8/15		休養、希望者ハ教会
8	8/16		中央電話局銀座分局、銀座通、松屋、三越呉服店
9	8/17		上野(動物園)、浅草(活動写真)
10	8/18		未定
11	8/19		午前八時海軍省、貯金局、千住花王石鹼工場
12	8/20		買物、午後休養(退京準備)
13	8/21	東京を出発、名古屋に到着	東京発、名古屋着
14	8/22	名古屋放送局	休養、希望者ハ教会、午後ラヂオ放送局
15	8/23	名古屋離宮、日本陶器、名古屋市役所、愛知時計	名古屋城、日本陶器工場、尾張時計商会
16	8/24	京都に到着	名古屋発、京都着、夜間京極夜景
17	8/25	京都市役所、御所、東西本願寺	御所、商品陳列館、東本願寺
18	8/26		インクライン、動物園、其他付近ノ名勝
19	8/27	大阪に到着、大阪市役所、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社	京都発、大阪着、毎日朝日両新聞社
20	8/28		造幣局、大阪城、新世界其他
21	8/29		休養、希望者ハ教会
22	8/30		東洋紡績工場、貝鉦製造工場
23	8/31		森永製菓工場、川崎造船所(神戸ニ至リ即時帰阪)
24	9/1		大阪発、門司着
25	9/2	戸畑市役所、旭硝子工場、八幡製鉄所、鎮海楼	戸畑旭硝子工場、八幡製鉄所(翌日筑後丸ニ乗船門司出帆)
26	9/3	門司を出発	

出典)

「実施」：各新聞報道および南洋協会(1926a:122-123)にもとづき、筆者作成(2012年8月)。
「予定」：南洋庁長官横田郷助より海軍次官大角岑生宛「南洋群島民内地観光ニ関スル件」1926年7月29日(防衛省防衛研究所所蔵「大正十五ノ昭和元年公文備考：雜件一」巻124)より転載。

注)

空欄部分は出典に記載がないことを意味する。

表3 第6回内地観光団(1927年)の行程

日数	月日	実 施
1	6/29	横浜に到着、東京へ移動
2	6/30	二重橋前、東京出張所、日本郵船、東京市役所、日比谷公園
3	7/1	近衛歩兵一連隊、靖国神社、淀橋専売局、買物
4	7/2	東京府第一中学校、小学校、大学校、病院
5	7/3	教会
6	7/4	銀座松屋、三越
7	7/5	浅草
8	7/6	動物園、上野公園、長瀬石炭工場
9	7/7	貯金局、湯島小学校、守屋氏宅
10	7/8	中央亭、東京市役所、東京出張所
11	7/9	東京を出発、名古屋に到着
12	7/10	教会、放送局
13	7/11	名古屋離宮、陶器工場、時計工場
14	7/12	名古屋を出発、京都に到着
15	7/13	京都市役所、御所、病院
16	7/14	比叡山
17	7/15	京都を出発、大阪に到着、大阪市役所、大阪府庁、高島屋呉服店、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社
18	7/16	新世界、道頓堀、美津濃運動具店、製氷所、造幣局、大阪城
19	7/17	宝塚、大阪を出発
20	7/18	門司に到着、門司市役所
21	7/19	製糖工場、紡績工場、ガラス工場、製鉄所
22	7/20	セメント工場、自由行動
23	7/21	門司を出発

出典)

サプロー (1927) にもとづき、筆者作成 (2012年8月)。